

特集にあたって

古藤 浩（東北芸術工科大学）

東北支部 SSOR（東北 OR セミナー 2024）を軸に特集ができないかという打診があったのは 2024 年 6 月でした。小さな支部でのイベントである東北 OR セミナー 20XX は、特別講演はともかく、一般発表では B4 や M1 の学生も少なくなく、それゆえまだ発展途上の研究成果の発表が多いので、できるだろうかという心配がありました。しかし、東北 OR セミナーが 10 年目となる節目であること、指導教員との共同論文として内容をリファインすれば十分すばらしい研究が積み上がっている状態であることから、お受けすることにしました。しかし、東北 OR セミナー 2024 の後、支部でこの特集について議論したところ、後述する事情によって東北 OR セミナー 2024 のみでの特集は難しいという結論になりました。そこで、東北支部内での研究・研究室紹介をかなり入れて今回の特集を組むことになったというのが、本特集の経緯です。

人口で考えると、日本国も日本 OR 学会も縮小の流れの中にあります。人口減少では日本の先端を進んでいるといつてよい東北支部域は、OR 学会の活動でもある意味先端を行っているといえるかもしれません。そこで、その経緯と状況について、古藤浩（東北芸術工科大学）から「東北支部 60 年の変化と交流環境の視覚化」という記事を執筆しました。そこでは、OR 学会東北支部の場合、単に人数が減ったのではなく、質的变化もあること、その中で東北支部として変革しながら対応してきたことを紹介します。また、質的变化の意味、活動の構造変化とその限界について多次元尺度構成法を応用したデータ視覚化手法を用いて説明します。

次に、本企画の元でもあり母でもある「東北 OR セミナー 2024」を題材としたルポの執筆を木村寛先生・稲川敬介先生（秋田県立大学）に依頼しました。ここでは、東北 OR セミナーの経緯・実施体制などを説明いただいた後、いくつかの発表内容の紹介を含んだその様子を書いていただきました。さらに、学生優秀発表賞、特別講演と紹介が進む中で、学生優秀発表賞では 3 件中 2 件が東北支部外の大学に所属する学生さんの発表となったことが紹介されています。公正な審査の結果ゆえなのですが、支部 SSOR の優秀発表内容に

よって本特集を組むことが無理になったのは、ここに起因するわけです。

一方、東北 OR セミナー 2024 での特別講演は東京都立大学の小笠原悠先生にお願いしました。小笠原先生は弘前大学で博士号を取得した東北支部ゆかりの方、さらに 2015 年に始まった東北 OR セミナーの最初の 2 年間に連続して優秀発表賞を受賞した、まさに東北支部出身のホープの先生です。ご発表の内容も観光と OR 的手法を組み合わせた価値のあるご研究です。それを「観光需要の季節性と周縁地域のバンドル商品」というタイトルでまとめ再構成していただきました。

四番目からの記事では、現在の OR 学会東北支部の屋台骨を支えてくださっている先生方から研究室での研究を紹介していただきました。まず、弘前大学の金正道先生からは、東北 OR セミナー 2021 で優秀発表賞を受賞した弘前大学大学院修士課程修了の小野皓多氏との共同研究の成果を記事としてまとめてもらいました。次に、東北大学の鈴木賢一先生からは東北 OR セミナー 2020 で優秀発表賞を受賞した Duvan Camilo David Higueta 氏との共同研究の成果を記事としてまとめてもらいました。秋田県立大学からは計画数理統計学研究室の木村寛先生、経営数理解析研究室の星野満博先生、生産企画システム研究室の稲川敬介先生の 3 先生に執筆いただきました。それぞれ、近年の卒業研究の研究内容を中心にした紹介になっています。さらに、福島大学の中山明先生にはネットワーク・フローの研究を中心とした研究の様子を、物流システム研究室の石川友保先生からは研究室のいくつかの研究の概要を説明いただきました。新潟大学の田中環先生、山田修司先生にもそれぞれに研究室の成果を書いていただき、また、研究室の取り組みの内容だけでなく、高校生向け・一般大学生・一般社会人向けの OR 啓蒙・普及活動の様子や建設分野・農業分野での産学連携活動の取り組みについても紹介されています。

東北支部は人数こそ少ない支部ですが空間的にも分野的にも OR 学会全体に似た広がりがあると思います。その全貌を感じていただければと思います。